

「ガラパ星からきた男」について

京都大学総合人間学部 1 回生 森京実

書き始めたのが締め切り当日の午前3時というのもあって(おい)すごく眠いですが、頑張ります。ネタバレありまくりです。

ところでドラえもんの「ガラパ星からきた男」という話をご存知ですか？一般的な知名度は低めの作品だと思われます。バイバインやスモールライトのような有名なひみつ道具が出てくるわけでもないし、「ぞうとおじさん」のような感動作というわけでもありません。しかもどこことなく変な話なんです。今回はこの話のどこが変なのか、ゆるく考えていきたいと思います。

作品の基本情報はこんな感じです。

「ガラパ星から来た男」

てんとう虫コミックス ドラえもん 45 巻

小学三年生、小学四年生、小学五年生に 1994 年 7 月号から 9 月号に掲載

全 51 ページ

- ・ 45 巻はドラえもんの最終巻
- ・ コミックスの最後の話であり、事実上の最終話
- ・ 7 月号から 9 月号までに分けて掲載というのも短編としては異例
- ・ ドラえもんは通常 10 ページ前後なのに対し 51 ページとかなり長い

次に内容を見ていきましょう。

いつものようにお手伝いをさせられるのび太。そしていつものようにのび太を襲う金欠。1ヶ月後には貯金が貯まっているだろうと考え、のび太はタイムマシンで未来に行く。幸いお金は貯まっていたが、空飛ぶ魚がいたり、しずちゃんのカナリヤが異様に強くなっていたりと1ヶ月後の世界にはおかしい点ばかり。さらに人の姿はなく、アリ人間が人間のように生活していた。報告しようと元の時間軸に戻るのび太だったが、ドラえもんの道具「わすれバット」で全て忘れてしまう。いろいろあってドラえもんのスぺアポケットをあさったのび太は未来にあるガラパ星という星との通信販売装置を手に入れる。ガラパ星では生物の進化をコントロールして人間に都合のいい性質を持つ生物をつくり出していた。のび太はガラパ星を使って芝刈り魚(=空飛ぶ魚)や強いカナリヤ、そしてアリ人間を作り出す。芝刈り魚は草むしりに、強いカナリヤは猫よけに役立ったが、家事を代わりにやらせるためにつくったはずのアリ人間は素材にしたアリがサムライアリという他のアリを奴隷化して働かせる種類のアリだったために、人間を奴隷化するた

めに地球に攻めてきた。アリ人間は体力・知力ともに優れ、一時は敵わないかと思われたが、強力化したしずちゃんのカナリヤによって見事撃退に成功したのだった。

という話です。だいはしよったので詳しくはコミックスをご覧ください。

ではいったいどこが変なのでしょう。異様な長さも変だし、タイトルもゴリゴリの SF らしくて異質です。

- ・わすれバットによる記憶喪失

「これでなぐると、そのとき考えていたことをわすれちゃう」、「バットの細いほうでなぐると思いだせるよ」(by ドラえもん)という道具。作中ではのび太が3回なぐられる描写があり、そのたびに大事なこと(=アリ人間の脅威)を忘れさせられる。読者は思い出したいのに思い出せないというよくある状況を追体験し、心理的な圧迫感を覚える。

- ・何度も同じ行動をするのび太

タイムマシンを使ってのび太が現在と1ヶ月後を行ったり来たりする。また視点も現在ののび太と未来ののび太の間を行き来する。加えてのび太は3回記憶喪失している。このため読者がすでに見たことがある行動が何度も繰り返される。「これはもう見たよ！」となる一方話の先が見えないのでとてもやきもきする。

- ・ほとんど活躍しないドラえもん

ドラえもんの話にはのび太が困り、ドラえもんがそれに手を貸すという構造のことが多い。10ページ前後の長さだと手を貸す部分が話のほとんどになるのでドラえもん成分高め。しかし今回の話では51ページ中20ページしかドラえもんが出てこない。ドラえもんの登場が半分以下になると世界が途端に混沌としてくるのも興味深い。

しかし、よく考えると変というより怖い話です。そもそもガラパ星がやばすぎる。ガラパ星という星は変な電波を浴びており、生物の突然変異が起りやすいという設定です。ここで未来デパートが金儲けのために生物の進化をいじっているのです。屈託のない笑顔で「思い通りの生物を作れるわけか！」と言い放つのび太が怖いです。

さらに作中でのび太は1回未来を変えて、また戻てるように見えます。ガラパ星にはもともと未来デパートのウランカナ氏と科学者のダイウィン博士がいたのですが、のび太がサムライアリを進化させに訪れたタイミングでこの2人が消えているのです。これはおそらくのび太がいったん人類が滅亡した世界線に迷い込んだために、未来人である2人の存在が無かったことになったことを表しているのではないのでしょうか。

他の話との類似性に目を向けてみると、F先生オリジナルではないものの南海大冒険と類似した点があると思います。生物兵器が大事な要素になっている南海大冒険にガラパ星のアイデア

が似ているような気がしなくもない。45巻そのものも表紙がボトルシップに乗ったのび太たちだったり、映画の元ネタの「南海の大冒険」収録巻だったりと関連性の高さも指摘できます。自信はないです。

何が言いたいかというと、ガラパ星からきた男という作品はドラえもんの中でとても重要な話なのではないでしょうか。F先生が最後に発表した短編がここまで長くて不思議な話だというのが意味深で仕方ありません。重大なメッセージが隠されているのではないかと探しても見つからないし、これが最後の話かと思って読むと泣けてきてしまいます。物語の中盤にかけて、ドラえもん不在のまま事態がどんどん悪くなっていくところに人生のシビアさを感じたり

...

読めば読むほど味が出てくるスルメのような作品です。

